

# 『今昔物語集』卷十四の法華経靈驗譚についての一考察

米 谷 悦 子

『今昔物語集』（以下「今昔」と記す）巻十四は、第一話から第二十九話迄が巻十三に続く法華経靈驗譚である。巻十四の説話も、他の巻と同様に先行の説話集を出典として構成されている。ここで扱う二十九話の法華経靈驗譚の多くも『大日本法華験記』（以下「験記」と記す）や『日本靈異記』（以下「靈異記」と記す）に、出典と思われる説話を見出すことができる。

これらの説話は巻十三と同じように、法華経に依る往生・転生・現世利益・現報等を描いているが、特徴的と言えるのは転生譚で数の上からも七割以上を占めている。この転生譚は、第一話から第八話迄の八話と、第十二話から第二十五話迄の十四話の二群に分かれ、内容も両者で少し異なっている。第一グループは、他人の追善供養に依る法華経の功德で善所に転生する譚であり、第二グループは現在法華経の持者である人々の過去、つまり現在法華経の持者になるに至った前世の因縁を描いた譚である。

本論は、以前に発表した巻十三・十五についての<sup>注①</sup>小論と同様、「今昔」と出典の説話の差異から「今昔」編者の意図を読みとろうとするものである。巻十三・十五に見られたような、より具体的に理解

『今昔物語集』巻十四の法華経靈驗譚についての一考察

の容易な説話化という一般的な傾向が、この巻十二でも見られるかどうか調べた上で、前に触れた転生譚について、少し詳細に考察してみたい。

## 一、出典との差異について

この二十九話の説話の多くが、他に出典を見出すことができるということは前にも述べたが、具体的には第四・八・十一・二十九話の四話が出典未詳、第二十六から二十八話までの三話が「靈異記」、残りの二十二話が「験記」の説話を出典として構成されている。

結論から先に言えば、この巻十四でも巻十三・十四の二巻に見られたと同様の傾向を見ることができるとすなわち、次のような点で原典との差異を指摘することができるのである。

- ・ 口称念仏の重視
- ・ 修行内容の簡略化
- ・ 靈驗の簡略化
- ・ 靈驗を夢とする
- ・ 仏教的觀念用語の書きかえ

卷十四の法華經靈驗譚の中で改変の部分が多いという意味でその跡の著しいのは、第一話「為救无空律師杜杷大臣寫法花語」である。この場合は特に加筆が多いのであるが、譚の中に含まれる要素など、内容は出典と見られる「驗記」巻上第七話と全く同じで、他に出典を求める必要はないと思う。加筆は譚の内容を大きく変えるようなものではない。例えば、主人公无空の出自を述べる場面で「驗記」は「律師无空。平生念仏は為。」の二句のみであるのが「今昔」では、次のような長文になる。

比叡ノ山ニ无空律師ト云フ人有ケリ、幼クシテ山ニ登テ出家シテ後、身ニ犯ス所无シ。亦、心正直ニシテ道心深カリケリ。然レバ、僧綱ノ位マデ成ニケレドモ、遂ニ、現世ノ榮花・名聞ヲ永ク弃テ、後世ノ菩提ヲ偏ニ願フ。此ニ依テ、本山ニ籠居テ念佛ヲ唱ヲ業トシテ、怠ル事无シ。此レ、一生ノ間ノ勤也。

また、仲平の夢に現われて法花經の書写を依頼する場面でも「今昔」では、无空自身がかなり細かく心情を説明している。

引用文中「幼クシテ山ニ登テ云々」は「今昔」の慣用表現であり、規範的僧侶の典型とも言うべき記述である。より物語的説話への言うならば文学的修辭とも言うべきものであろうか。このような文学的修辭と言える例は、この他第二話、第九話などにも見える。

ただ引用文中、「念佛ヲ唱ヲ業トシテ」とある点は注目すべきである。巻十五では、出典にある「念仏」のほとんどに「唱」あるいは「称」を付け加えて「口称念仏」という性格を明らかにしていた。巻十四では主人公が念仏を業としている例は、これ一例のみであるが、同様の処置であろうと思う。更に无空は蛇身に墮ちた後、

仲平の夢に現われて次のような訴えをする。

我レ、生タリシ時、偏ニ念佛ヲ唱フルヲ以テ業トシテ、「必ズ極楽ニ生レム」ト思ヒシニ、我が身ニ貯ヘ无カリシニ依テ一没後ニ弟子共煩ヒ有ナム」ト思テ、錢万ヲ没後ノ析ニ充テムガ為ニ、房ノ天井ニ隠シ置タリキ。(略)其ノ罪ニ依テ、蛇ノ身ヲ受テ、錢ノ所ニ有テ苦ヲ受ル事量无シ。(傍線筆者)

つまり「念仏を業としていたから往生できずと思っていたのに云々」と言うのである。しかも傍線部分は「驗記」にはない、「今昔」編者の加筆である。これは、「今昔」編者が无空の修していた念仏を無視できなかったという点で、その重視の傾向を示す例である。又、「念仏」を修していても蛇身を受けるのかという享受者の疑問を封じる為に、編者自身が敢えて先に疑問を提出したと考えてもよい。このような念仏重視の傾向は、无空が往生を遂げる最後の場面にも表われている。というのは彼が仲平に次のように礼を述べるのである。

我レ、君ノ恩徳ニ依テ蛇道ヲ免ル、事ヲ得テ、年来ノ念佛ノ力ニ依テ、今、極楽ニ參レル也。(傍線筆者)

「君ノ恩徳」は法華經を書写した仲平の恩である。つまり、法華經の功徳に依って蛇身を抜け、長年の念仏の功徳で極楽往生を遂げたということであろうか。傍線部は「驗記」にはない。前に引用した「我レ、生タリシ時云々」の无空の言葉と呼応する「今昔」編者の加筆である。

この巻十四の法華經靈驗譚の中で極楽往生の譚は、この第一話のみで、上生までは法華經の靈驗であつても、往生となると念仏の力

であるというのが「今昔」編者の考え方ではないだろうか。

このように巻十四では二十九話の譚の中で、出典ではただ一カ所「念仏」という語にあくまでこだわることによって、念仏重視の立場を明確にしている。

次に修行内容の簡略化であるが、この巻十四では他人による法華経の追善供養が中心で、主人公自身が仏道修行をしている例は少ない。ここでは他人による追善供養の記述の簡略化も含めて考える。すると、第七話「修行僧、至越中立山會小女語」では、「験記」が

為女書写妙法華経。供養解説。発願廻向。至心誓願。拔地獄苦とあるのに「今昔」では

女子ノ為ニ法花経を書写シ奉リツ

と極めて簡単なるなどの例が認められる。その他にも、第十三話「入道覺念、持法花知前生語」では「験記」第七十八話の

厭離俗網。志在仏法。剃鬚。

威儀具足。具心清淨。質直柔和。怖罪悔過。道心堅固。

又、第十五話「越中國僧海蓮、持法花知前世報語」では、「験記」第八十九話の

早疾諂誦。任運無礙。

難行苦行。断食断塩。

など、主人公の修行態度を述べた句が省略されている。このような修行内容の簡略化は、巻十四でも数や規模は小さいながら各所に認められる。

修行内容に対して、靈験も簡略化されている。ここで扱っている法華経靈験譚の場合、靈験は転生であることが多いので、転生の場

【今昔物語集】巻十四の法華経靈験譚についての一考察

合はその証・奇瑞を含めて考えた。この奇瑞は、衣服を整える、音楽・異香などおおむね典型的であるが、第五話「為救野干死寫法花人語」では「験記」第二百二十七話の「香氣留空矣。」が省略されて居り、第六話「越後國寺僧、為猿寫法花語」では猿から国守に転生した藤原子高（「験記」第二百二十六話では紀躬高）夫妻に対する「後生妙果。宛如指掌」という「験記」の記載が削られている。後者と同様の例は

豈疑後世哉。（「今昔」第十四話・「験記」第七十八話）

他生天眼明淨。徹見大千。乃至度他得示現。（「今昔」第十九話・「験記」第二十七話）

得三菩提。（「今昔」第二十話・「験記」第二十六話）

などで、これらはずまり更に未来への希望的予言を削っていることになる。

更に、巻十三・十五で特徴的であった靈験や奇瑞を夢と設定しなおす例が、この巻十四でも二例認められる。

竜樹菩薩現宿老形告云（「今昔」第二十一話）

↓夢ニ「宿老ノ僧来テ告テ云ク（略）我ハ此レ竜樹菩薩也。

（「験記」第五十三話）

至於天曉不睡不覺。有一天女而現半身形。（「今昔」第二十二話）

↓夢ニ「天女有テ、身ヲ半バ現ジテ（「験記」第二十五話）

がそれであるが、やや消極的な例としては第十話で幾つかの靈験を挙げている部分で「験記」の「如是奇瑞。或在夢中。或有眼前。」という句がなくて、現実と夢を書きわけていることも加えられると

思う。

この他に、出典と「今昔」の相違している点としては、「天女」等の極く平明ながら観念的慣用語と思われるものを「天女ト云フラム人ノ如ク」という表現に改めている例や、法華經千部書写の願を立てて「数十年」努めたとあった所が「十数年」になるなど、数値の変わる例もあった。

このような出典と「今昔」の差異は、卷十三・十五にも見られたものである。そして、これが二者の享受者の質の違いによると考える。仏教的予備知識の稀薄な、靈驗と観念的にとらえ得ない享受者に対する「今昔」編者に依る、より容易で具象的な靈驗譚への配慮であろう。これで、少なくとも卷十三・十四・十五は同じ意識のもとに編まれたと見ることができよう。

## 二、転生譚

卷十四の法華經靈驗譚の特徴である転生譚は、実は卷十三の終り三話からひき継がれたものである。又、言い添えるならばこの場合、特徴的と言ったのは出典に較べて「今昔」独特という意味ではなく、「今昔」の中でそれぞれの法華經靈驗譚が持つ内容の問題である。

### 第一話〜第八話

この一群の説話は卷十三のほとんどを占めた、自らの法華經信奉によって、直接に何らかの靈驗を受けるという基本的な構成とは異なり、一度は悪趣に墮ちるといふ段階を経て法華經の功德によって救われるという構成になっている。即ち、図式的に示すと次のよう

になる。

第一話 僧(律師) ↓ 蛇 ↓ 極楽

第二話 (男) ↓ 蛇 ↓ 忉利天

(男) ↓ 鼠 ↓ 忉利天

第三話 僧 ↓ 大蛇 ↓ 都率天

女 ↓ 大蛇 ↓ 忉利天

第四話 女 ↓ 大蛇 ↓ 兜率天

第五話 女(野干) ↓ ○ ↓ 忉利天

第六話 猿 ↓ 国守

第七話 女 ↓ 地獄 ↓ 忉利天

第八話 女 ↓ 地獄 ↓ 忉利天

このように、この群の説話はほとんど二度の転生を描いている。又、他人による追善の法華經供養がテーマである。この点で本人の法華經信奉により直接に往生あるいは転生を遂げる、又は靈驗を受けるという卷十三で見られた法華經靈驗譚とは、性格を異にしている。そのため考察の手順が、やや煩雑になる。つまり、これらの譚を見る時には、最初の転生以前に何か自分で仏道修行をしていたか、それが転生(墮悪趣)にどう影響しているか、二度目の転生の因となった他人による法華經供養はどのようなものか、それが二度目の転生にどう影響しているか。更には、最初の転生(墮悪趣)以前にしていた修行は二度目の転生に影響していないかということ全てが問題になるからである。

この中で、二度の転生を描いていないのは第六話だけであるが、内容はこれらに近い。越後国で二匹の猿が法華經の持者を供養して

法華經書写を依頼する。その二匹の猿の死後持経者は書写を中断するが、四十余年後、この二猿は越後国守夫妻（守）となって寺を訪れ、写経を完成させるのである。普通ならば転生を遂げた所で終るところを、後日譚まで添えたのは、写経の完成が眼目であった為と思われ。この譚には写経した僧侶の往生という付録もある。しかし「驗記」にはあった国守夫妻の往生を予言する句が削られている。ともあれ、この第六話も墮惡趣より前の部分の脱落した変型として、この群に加える。

それでは、第一段階に於いて、その主人公が何か仏道修行をしていたか、そして墮惡趣の直接の原因は何かということを見る。

主人公達の内、僧侶は前掲第一話の无空と第三話の美男僧のみである。无空の修行については前に述べたので省く。

第三話「紀伊國道成寺僧、寫法花救蛇身語」の僧は熊野參詣の途上で、彼の仏道修行については特に記載はない。蛇身を受けたのは女の愛欲を避けきれなかった為である。

僧侶でない者達の場合、第二話の蛇と鼠は「宿世ノ怨敵」として、幾代も前の過去世から生まれ変わり、死に変わり殺害しあっていたと考えられる。ここでも、それ以前の仏道修行については触れていない。そして今畜生の身を受けているのは、その怨念の妄執を断ち切れない為である。

第四話の女が蛇身を受けたのは、一夜契りをおこなった帝王から与えられた金千両に執着を残した為で、この女がこれまでに仏道修行していたという事は記載されていない。

第五話、女に化けた野干（狐）が死んだのは人間の男と関係を持

【今昔物語集】巻十四の法華經靈驗譚についての一考察

った為、当然仏道修行はない。

第七・八話は立山地獄の譚で、第七話の女は父親が木仏師で仏を売って生活していた為、この小地獄へ堕ちている。ただ、この女は生前に觀音を信仰しており、その縁日の十八日に觀音が彼女に替って苦を受けている。これは、法華經の威力が觀音のそれよりも大きいという訳ではなく、双方の守備範囲の違いを示している。後にも触れるが、最後の女の切利天転生で「我レ、威力觀音ノ御助ニ依テ」とある。

第八話の女が立山地獄に堕ちた理由は具体的には述べられていないが、自ら「罪ヲ造リ、人ニ物ヲ不与ズシテ」と言っている。この女が死んだ時、家族は大勢の僧侶による法要を営んでおり、又、立山地獄を訪れた時も僧を同行し、錫杖供養、法華經講などを行っている。

以上、この説話群で生前に仏道修行をしていたと書かれているのは三人に過ぎず、まして明確に法華經と書かれている者は一人もない。これは出典である「驗記」も同様で、「今昔」はその記事を忠実に受け継いでいる。そして、その三人についても、それらの修行では善所に転生するのに不足であったというような記載はない。第一話の「念仏を唱えていたのに云々」という「驗記」にはない无空の言葉については、前にも述べたが、念仏ではだめで法華經ならばよいという強調をしようという作意では決してない。むしろ念仏を無視できなかった「今昔」編者のあり様を示すものである。彼が蛇身を受けたのは、あくまで錢への一瞬の執着が原因である。

法華經でなかったからだめだということでもないし、念仏や觀音信

仰を以つても救いきれない程の悪業であつたという説明もされてはいないし、逆に、念仏や観音信仰のおかげで地獄に墮ちるべき所を畜生で済んだというのでもない。たまたま、その主人公がそれを修していたという程度の設定である。

つまり、この八話に於いては生前仏道修行をしていたか否かは、全く主人公の墮悪趣とは関係がない。

墮悪趣の直接の原因は、今まで述べてきたように、金錢への執着、愛欲、怨念、人に物を与えなかつた、仏像を売つて生計を立てた等であるが、その罪の軽重により墮ちる悪趣が異なるなどの細かい配慮はない。

こうして、悪趣に墮ちた主人公は法華経に依る救済を生きている人間に依頼する。ここから説話は、これら法華経靈驗譚の中心である第二段階に入る。ここで問題になるのは、依頼される人間の種類と、追善として修される法華経の内容であろう。

依頼されるのは、生前の知人(第一・三・五話)・親(第七話)・子(第八話)の場合が多いが、第四話「女依法花刀轉蛇身生天語」のように、偶然行きあわせた全くの他人である場合も少なくない(第二・六話)。他人が仲介して親等に取り次ぐ場合もある(第七話)。又、依頼する手段は夢が多いが、靈が直接に姿を現わす場合もある。しかし、これはやはり尋常ではないと思われていたものらしく、第七話では観音の功德と説明され、第八話では、

夢ナムドニ示スハ常ノ事也。現ニ此ク告ル事、世ニ不聞エヌ事  
という言葉がある。この説話の出典は未詳であるので断定的なことは言えないが、この部分は「今昔」編者の加筆で、しかも生の声と

言えるかも知れない。

このように、殊に徳の高い僧だとか、験者に依頼するのではなく、肝心なのは行う人の資質ではなく法華経そのものと、少なくともここでは考えられている。そして、この八話では全て書写であつた。ちなみに、一部(第一・二・七話)・一部未完(第六話)・如来寿量品のみ(第三話)・七日毎に一部(第五話)・千部(第八話)であるが、書写の多少によって転生する場所が異なることはない。

第三段階ではこうして悪趣を免かれた主人公がその証を見せる。八話全てが夢告の形で描かれているが、最初の夢と異なり喜色を浮べ、衣服を整え、音楽、異香など類型的なものである。更に「驗記」では夢でなかつたものまで夢になっている。

この八話では忉利天・兜率天・極楽・人間に転生しているが、その結果と書写量には関係がなく、むしろ生前の修行がわずかながら影響している。例えば第三話は、有名な日高伝説をモチーフとしているが、美男僧と女が共に蛇道に墮ちていながら、老僧の法華経如来寿量品書写に依つて、それ／＼兜率天と忉利天に転生しているのは、生前僧であつた男と僧に邪念をしかけた女の宿業の違いが考慮されているのであろう。第七話の「観音ノ御助」も同様に考えてよい。

悪趣に墮ちた段階で、それまでの行為が御破算になるわけではない。こういう性格は「驗記」を受け継いでいるが、无空の加筆などは「今昔」に於いてよりその傾向が強いことを示している。

以上のように第一話から第八話までは墮悪趣と天への転生の二度の転生を描いている。これらの譚の眼目は法華経による救済の事実

である。従つて、それ以前の悪業や墮悪趣は詳細に書きこまれていない。生前の仏道修行が墮悪趣に影響することはないし、悪業の程度によつて悪趣が異なるなどの区分はない。法華経による救済という事実が極めて重いために、その法華経書写の量など枝葉にすぎず二度目の転生を左右することはない。これらは、おおむね「験記」から引き継いだ性格である。

#### 第十二話～第二十五話

この十四話は法華経の持者の前生譚である。特徴的なのは、この一群の主人公達のほとんどが、何かマイナスの要因を持っているということである。第十二話から第十八話までの七人の持経者は、法華経のある部分だけを暗記できない。その他は、盲目(第十九話)・色黒(第二十話)、他人の夢では狗に見える(第二十一話)、物を言う口が囁む(第二十三話)、色白で声が荒い(第二十四話)等である。持経者達はその因を知る為に修行をして、示現を得て自分の前生を知り、更に法華経に専心するというのが、十四話に共通する内容である。

まず、法華経を完全に暗誦できない七人について言えば、その部分は方便品の比丘偈二字だけ(第十二話)から、三品(陀羅尼・嚴王普賢)全部(第十五話)まで様々である。主人公は全て僧侶で、彼らは修行の後、夢で自分の前世を知る。それによれば、彼らは前世に僧・衣魚・黒馬・蟋蟀・狗・蛇などであり、自ら法華経を持していたがその文字を損なっていたり、持経者の傍で法華経の一部を聴聞していた。その功德で人間と生まれ持経者となったが、損なったり聞かなかつたりした部分を暗記することができないのである。後

#### 「今昔物語集」巻十四の法華経靈験譚についての一考察

に暗誦できるようになる譚と、今生ではできない譚とある。宿業という点では暗誦できない方が面白いが、意識的な書きわけはない。第十九話から第二十四話までは身体に特徴を持つ人の譚で、第十九話の盲目の女を除いて全て僧侶である。話の内容はほぼ前者と同じで、前生に蛇・黒牛・狗・野干(狐)・牛・白馬等であつたものが聴聞の功德で人間に転生したが前生の気分を残しているという夢告を受ける。(第二十二話「験記」は夢でない)

ところで、これらの説話は全て「――、持法花知前世語」――、(説)誦法花知前世」という題がついている。しかし、これら十四話全語を通して、前世を知る為に法花経を誦誦したという例は一話もない。例えば第十二話の恵増は

長谷寺ニ參テ七日籠テ、觀音ニ申ス様、「願クハ、大悲觀世音、我レニ此ノ二字ノ文思エサセ給ヘ」

であるし、その他も「三宝ニ祈リ申シテ」(第十三話)、「三宝ニ祈請シテ」(第十四話)、「立山・白山ニ參テ祈請ス、亦、國々ノ靈驗所ニ參テ祈リ申ス」(第十五話)、「一夏九旬ノ間、普賢ノ御前ニシテ難行苦行シテ」(第十六話)、「藏王ノ御前ニ參テ、一夏九十日ノ間籠テ」(十七話)、「佛神ニ祈請シテ」(第十八話)、「比叡ノ山ノ根本中堂ニ將テ參テ」(第十九話)、「長谷ニ參リテ觀音ニ申シテ」(第二十話)、「七日、食ヲ断テ堂ニ籠テ」(第二十一話)、「比叡ノ山ノ根本中堂ニ參テ七日七夜籠テ」(第二十三話)、「中堂ニ籠テ」(第二十四話)となつている。この中で、明らかに法華経と関係があるのは暗誦できない普賢品の暗記を普賢に祈つた第十六話の蓮尊だけである。つまり、限定的な見方をすれば、前世の因縁を知り得

たのは直接的には法華經の靈驗ではないことになる。

それでは、これらの譚ほどの部分で法華經靈驗譚と言い得るのか。正確に言えば、これらの説話の中で靈驗と言えるのは、蛇・牛・狗等の畜生が人間に転生したという部分である。そして、それはほとんどの場合、聽聞に依る功德である。つまり、これらは過去↓転生↓現在という通常の形でなく、現在↓(過去↓転生) という懐古の形をとった法華經による転生譚であるというのが、一番正しい見方であると思う。しかし、『今昔』編者はその題名が示すように、過去の因縁を知り得たという所をも含めて法華經の靈驗譚としているようである。「驗記」の場合は、題名はなく主人公の名前のみなので、どの部分を法華經の靈驗と考えているか明らかでないが、おそらくは、畜生が主に聽聞の功德で人間に転生したという所であろう。これは『今昔』編者が、法華經の功德はその場限りのものではなく、転生したこと、しかも持経者になったこと、その因縁を知り得たこと迄を含めて、永い時の流れの中でとらえていることがわかる。中には、更は修行に励めば来世は往生することも可能であるという予言が附されているものもある。しかし、この現世以後、つまり来世の仏果に対しては『今昔』編者は消極的である。第一章の靈驗の簡略化で述べたように、「驗記」の予言を削除している例が三例あった。

### 三、その他

最後に転生譚以外の譚について簡単に述べる。これは、前に挙げた二群の転生譚にはずれる譚で、その性質は雑多である。第九話は

現世利益譚でさしたる特徴はない。「驗記」と比べると、やや説明過剰きみの物語化がみられる他は、例によって数値の変化があるのみである。第十話は悪人往生の系列に属する。「驗記」と比較すると修行・奇瑞の部分に簡略化がある。

第十一話は、他の法華經靈驗譚と少し趣きが異なる。天王寺で法華八講を行う際に、聖徳太子の上宮王の疏を使おうと、それを秘蔵する法隆寺に書写を申し入れたところ、法隆寺側では、前夜老僧に「快く見せよ」という夢告があったので、用意を整えて待っていたという内容である。厳密に言えば一般的な法華經靈驗譚とは形が違い、本文中にも「實ニ此レ、太子ノ御告也」と言っている。しかも、これは出典未詳でもとくく法華經靈驗譚としての性格を持つものかどうか不明である。このことから『今昔』編者が法華經の靈驗を広範囲にとらえていることがわかる。

最後の四話は僧侶一人を含む現報譚である。現報としては頓死・経文の実現<sup>注⑥</sup>などがある。殊に面白いのは出典未詳の第二十九話である。能筆家橘敏行は人に頼まれて法華經を多数書写したが、精進せず肉食・女犯のままであったので、依頼した人々は悪趣に堕ちた。冥官に訴えられた彼は、咄嗟に三部經(金光明經)書写の誓願を立てて許されるが、また現世の快樂におぼれて写経を怠り、死後悪趣に堕ちて、紀友則に依頼して写経してもらい苦を免れる。「愚ナルハ、遊ビ戯レニ被引レテ、罪報ヲ不知シテ如此クゾ有ケル」という結びの効いた一話である。これは法華經の現報譚であると同時に四部經の靈驗譚でもあり、自然に第三十話以後の諸経靈驗譚に続いている。



この現報譚を以つて、卷十三以来七十三話に及んだ法華経靈驗譚は終る。

## ま と め

以上、卷十四に収録された二十九話の法華経靈驗譚を見て来た。

その結果、出典との間には卷十三・十五に見られたと同様のより具体的で理解の容易な靈驗譚へという変化の跡が見られた。それと同時に、この卷十四は卷十三と較べて、因果応報、あるいは宿世の因縁という考え方が、より顕著に表われているといえる。その因果を過去・現在・未来の永い時の中に、より広範囲に捉えようとしているように思われる。卷十三に多く見られた靈驗譚は、本人の法華経の説誦や書写によって受ける現世利益や往生・転生の靈驗がその時のみで描かれるのに対し、卷十四では現在悪趣にある者が過去に何であつて、何の因で悪趣にあるのから明らかにし、その上で法華経の救済による転生を描いている。しかも宿業は一つの転生を機に無に帰するものではない。経典を損なつたり、経文のある部分を聞かなくなつたという「因」は法華経によつて転生した後も「果」をもたらず。

このように卷十四では法華経の靈驗を見る目が卷十三よりも長くなっている。しかし、これらの特徴の全てが「今昔」独自でもなく、卷十三と違つた卷十四の編集基準のもとに、「験記」、「靈異記」から説話が採用され、それら出典の性格を受け継いでいるが、口称念仏の重視や題名の問題など、「今昔」編者の考え方を伺うことができる部分も少なくなかつた。題名の問題などは、より永い時間の

『今昔物語集』卷十四の法華経靈驗譚についての一考察

中で靈驗を捉らえ、因果を説こうとする考え方が、原典よりも「今昔」の方に強いことを示しているように思われる。しかし、それは来世への希望に対して消極的な「今昔」の態度は何を意味するのか。「今昔」は一見矛盾をはらんだ要素が混在しており、一概に判断するのは危険である。それは過渡期の宿命でもある。ここでは、現在に果をもたらしめている過去の因はある程度具象的であるが、現在に果をもたらしめている因が未来にもたらず果は、抽象の域を出ないとする用心であろうか。

いづれにしても、第一章でも述べたようにこの卷十四でも出典と較べてより具体的、容易な靈驗譚が念頭にあつたことは間違いない。更に、靈驗をより永い眼で捉えることによつて、過去・現在・未来の因果の法を、より強烈に享受者に印象付けようとしているのであろう。その意味では、卷十三から続く法華経靈驗譚の最後を締めくくる第二十九話は、その永い時の流れを理解せずに、刹那の現世の快楽に執着しがちな、より大衆的人間の心を戒めようとする配列であろうか。

注① 拙論『今昔物語集』卷十三に於ける法華経靈驗譚についての一考察 『平安文学研究』第六十八輯

同 『今昔物語集』卷十五の方法 『中古文学』第二十九号

② 引用は岩波日本思想大系『往生傳 法華験記』による。以下同

③ 引用は岩波日本古典文学大系『今昔物語集』三による。以下同

又、本論中地の文に用いた表記は人名に限り「今昔」を優先し、その他については現行の表記法にしたがった。

④ 第五話「為救野干死寫法花人語」

⑤ 第十話「陸奥國壬生良門、弃惡趣善寫法花話」

⑥ 大系本による

⑦ 「今昔」は藤原子高 「驗記」紀躬高

⑧ 第十二話「醍醐僧惠増、持法花知前生語」・第十三話「八

道覺念、持法花知前生語」・第二十三話「近江國僧頼真、誦法花知前生語」は聽聞ではない

⑨ 第九話「美作國鐵堀、入穴依法花力出穴語」〔「驗記」百八話〕

時近隣人四十人。↓其ノ邊ノ人、卅餘人。

但し「驗記」宝生院本、彰考館本は「卅人」

⑩ 第二十七話「阿波國人、謗寫法花人得現報語」譬喻品第三

「謗斯經故 獲罪如是 若得爲人 諸根暗鈍 矧陋巖窟 盲聾背偃 (岩波文庫「法華経」) 等